

ΣΤΕΦΑΝΟΣ

吳 茂一譯詩集

花 冠
ΣΤΕΦΑΝΟΣ



紀伊國屋書店

著 者
呉 茂 一

1897年東京生。東京帝国大学文学部卒。
旧制一高、東京大学、名古屋大学教授、
在ローマ日本文化会館館長等を歴任、
1966年より上野学園大学教授、著作翻訳
に従事。主要著訳書「イーリアス」「オ
デュッセイア」「黄金のろば」「人生の幸
福について」「ギリシア悲劇、喜劇等を訳
述、「ギリシア神話」「西洋文化の源をた
ずねる」「ギリシア悲劇」等を著述。

花 冠一呉 茂一譯詩集

定価 3,500 円

1973年 4 月15日 第 1 刷発行

1973年10月30日 第 2 刷発行

発行所 株式会社 紀伊國屋書店
東京都新宿区新宿3の17の7
電話 (354) (代表) 0 1 3 1
振替口座 東京 1 2 5 5 7 5
出版部 東京都千代田区五番町12番地
電話 (263) 4 9 1 4—5 (編集)
(261) 0 8 5 7 (営業)
〒 1 0 2

印刷 精興社
製本 三水舎

落丁・乱丁の際はおとりかえいたします

目次

ぶらえるうでいうむ・エジプト詩集
すてばのす

ぎりしあ詞華集抄

倅歌および碑銘

戀愛詩

獻詩および諷刺詩

ぎりしあ抒情詩人

あるきろこす

あるくまあん

あるかいおす

さっぽお

いーびゅこす

あなくれおーん

しもーにでーす

ろーま抒情詩人

かとうるす

ほらーていうす・ふらつくす

ぶろーべるていうす

えびきたりすま・中世および近代

一

二

三

四

五

六

七

八

九

一〇

一一

一二

一三

一四

一五

一六

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

ふらえるうでいうむ
エジプト詩集

PRAELUDIUM
POEMAT A AEGYPTIANA

表紙陰刻…デールロス島貨幣より。BC五五〇
～五二〇頃のもの。圖柄は豎琴（ギター）
見返し圖案…ボンベイ壁畫より。新發掘區域
Reg. 1. insula 9, No. 5. 蛇のゐる木。彩色。
外箱および扉…レーギオン市四ドラクマ銀貨
BC四一五～四一〇頃。アポローン頭部。

アトンへの讃歌*

地平に白づく（太陽）レー・ハル・アクティをたたへまつる、
シニールとしての御名において、アトンの圓輪にいまし、
未來永劫に生命をたもたす。生ける神、偉大なるアトン、
祝祭にありて、アトンが取り繞くほどの、萬象のおん主、
廣天の主、大地の主、アケタアトン（アトンの都）、
なるアトンが社の大御主を、讃ふるは
上下エジプトの王、眞理にいこひ、兩つ國を治むるもの、
ネフェル・ケベル・レー・ワ・エン・レー

きらやかに、君、天なる境にあらはれたまふ、
生ける御神、アトン、生命のみなもと、
ひむがしの地平に、いまし君登りたまへば、

あらゆる國、あらゆる郷は、汝がきらきらしさに満たされつくしぬ、

君は仁慈にまし、偉大に、光輝をたもち、あらゆる國に高く臨みたまふ、

君が光矢は、汝がつくりませる萬象の涯なる國々までも限なくわたる、

君こそレーにましませば、萬象の涯にまでも及ぶなれ。

かくてこれらの國々郷々をしづめ平らげたまふは、君が愛しむ王子のためとぞ。

君ははるか遠にませど、君が光矢は陸にあまねく、

君は彼らの面を照らすに、おん出ましを知る人なし。

西のかなたなる地平に君没りたまへば、陸はみな闇に裹まれ、死せるが如し、

人々は、おのがじし、頭をつつみて、屋のうちに眠り、

一つ眼は、他方の眼を、また視ることなし。

その頭の下なる財産も、あるひはことごとく盗み去られむ。

されど人はこれを、つひに覺らざらむ。

野の獅子はことごとく、その隠棲を出で來たれり、

あらゆる這ふ蟲も、來りて刺をもて刺さむ。

暗闇は屍衣なれば、大地は沈黙にふかくもだせり、

彼らを造りませるもの、地平にふかく憩ひたまへば。

朝づきて、君、地平に昇りたまひ、眞晝間に、アトンとして耀けば、
暗闇を拂ひ退けて、光矢を遣りたまふ。

ふたつの國は日毎日に、祝典を迎ふるなれ、
目覺め、かつおのれが脚の上にたちて。

君（彼らを）立たせたまへれば。

人々は生の身を洗ひ、衣を着けぬ。

その手はこぞりて君が登天を讃めたたへ、
世をあげて、つとめにいそしむ。

もろもろの家獸は、飼草にみち足り、

草木は緑なり、

鳥は翔りて巢を出で、

翼をあげて、君が神體をたたふ。

野のけだものも、みな脚の上に跳び立ち、
翔るもの、羽搏くもの、みな生を得たり、

君のぼりたまへれば。

船は河^{***くだ}を下り、また遡る、

道はみな開けたり、

君いまそかりたまへれば。

君を仰ぎて魚は流れに躍り、

君が光りは、緑なる大海のさ中^{なか}にあり。

をみなのうちに種子を創りたまふもの、

君は男子の體內にくすしき液を調へさしめ、

母の胎に、その子をはぐくましめたまふ。

泣きじやくる兒に宥めすかすものをあたへ、

彼を慰めたまふ君は、げに胎内の襦母にこそませ、

創りいだしたまへる全^{たへ}てに、生^{いのち}命をあたふるなれば。

その兒、母胎を降りて、生まれいづる、

その日、今し息づかんとするとき、

君はその口を、残^{のこ}りなく開^{ひら}かしめ、

その要むることごとを、與へたまふ。

卵の内なる雛鳥、今し殻にありて、物言はまく

欲りすれば、君、殻内にして息を得させ、生命を繋がしめたまふ。

卵の内なる雛鳥に、君、割りて出づべき用意を整へさすれば、

期満ちをはる日、囀らむとて雛は卵の外へに、

殻より現れ出でたれば、脚の上に立ち、歩みを進む。

いかばかり多趣多様なる、君が創りませるものらは、

人の面、その眼より祕されたりとも。

おお唯一なる神、この世に比ひまたとなき者、

君こそこの世界を、御意のままに創りなしたまへる者なれ、

君がただ獨りして在りしに。

なべての人の類うから、家畜、また野のけだものたち、

また地上なるものの全て、脚の上にしてかちひろふものら、

また高きにあるもの、翼をもちて天翔けることごとを。

なべての都邑の主として、彼らのためさし登りたまふ君こそ、

眞晝間のアトン、稜威比びなきもの。

遙かなる異國^{ちごく}とてまた、君によりて生命^{いのち}を獲るにあらざるなし、
君こそ天^{あめ}なる際^{きま}にネイルの河を置きたまふなれば。
その河水の、やがては彼らのために、天を降り來、
山々のへに、綠なる大海^{わたつみ}をなす波を捲きて、
彼らの都邑に、彼らの墾田^{はりた}に、灌水^{みづ}がんがため。

君が光矢は、牧^{まき}に限なく乳を與へぬ、
君登りたまふとき、彼らは生きづき、
君がために、おひ茂るなれ。

汝^ながつくりませる全てを、やがて育^{はぐ}くみたまはんとて、
君はもろもろの季節を設けたまひぬ。

冬は、彼らに涼を與へしめんとて、また、
暑季は、彼らの、君を味はひ得んがために。

君はまた、かしこより登らしめんとて、遙かなる天涯を創りませり、
汝が創造したまひし萬象を見そなはさんがために。
君はただ獨りして在^{いまそ}かりしに、

生命なるアトンとして、己が形相もて登天したまひつ、

現前し、照臨し、退御まし、また攝受しましたつ、

ただ獨りして、千萬の形象を創り出したまひぬ、

ありとある都邑、また町村、原野、道路、あるは河川を。

さればあらゆる人の眼は君を、彼らにさし對ひつつ、認むるなれ、

君こそ、地上にかがふ眞晝間のアトンなれば。

君が御手によりて、三大世界は存立を得たれ、

君が彼らを創らしめたる、そのまにまに。

すなわち、君さし登りたまへば、彼らは生きづき、

君没りたまへば、彼らも死に歸する。

君おん身づからこそ、生のいのちなれ、

生けるものみな、ただ君によりてのみ、生を享くるなれば。

汝が没るときまで、人が眼は、美きもののへに見据ゑられ、

君、西に没りたまへば、すなはち人は仕事を休め、憩ひにつく。

されど君復た登天しませば、

ありとあるもの、ことごとく、生きづき榮ゆる、王のため。

何となれば、君こそまことに世を建てたまひし者にて、
汝が神體より出で來ませる、汝が王子のため、
彼らを育くみたまひしなれば。

上下二つのエジプトの王……イクナアトン（がため）

また王が首妃なるネベルティティ（にと）、

とこしへに生を保ち、ここはに若やぎませる（兩人のために）。

* エジプト王イクナアトン（アケナアトンとも。アトン神に仕ふるもの、寵者の意）の作といはれる。前十四世紀前半、テル・エ
ル・アマルナ單石碑銘より

** カアとは太陽神ラーの象徴なる神體をさす。

*** 河とはナイル河のこと、上りは南へ、下りは北へ、を示す。

彈琴者の歌^{*}（埃及古王朝期^{エジプト}）

勝ち誇るインテフ王の館^{やかた}ぬちなる

歌の曲^{うた}、彈琴者^{ことひき}にそなへられたもの

御運は隆昌、すぐれた殿の、

まあ好運とて 時に損^{そな}はれもしょうが。

人の世は、次々に過ぎ去つてゆき、代りがつづく、

これが先祖の代^{だい}からの定^{きま}まり。

神^{*}さま方、昔世にあつたその方々も、今は各自のピラミッド内に寝^{やす}んでおいで、

祝福^{***}を獲（て死んだ）者^{***}らも、それぞれ自分のピラミッド内に埋^うまつてゐる、

だが、その館^{やかた}を建てた人々、その人々の居る場所は見つからない。

見るがいい、この人たちが、どのやうにあしらはれたかを。

私らは聞いた、リエム・ポテブの、またホル・デデフの訓^{しとく}へを。

そのいましめを、あれこれと世の人々は今ももてはやすが、現在どこに、彼らの住まふところがある。ないではないか。

その屋の壁は壊れて落ち、憩ひ家はどこにも見えない、

さながらこの世に、彼らのかつて居たことはないかのやうに。

いかさま、彼の世からまだ、歸つて來たといふ人は、一人もゐない、その様子が、どんなかをわれわれに報告するとして。

またそこで、入用なのはどんなものかを言ひ聞かせるため。

われわれの思ひわづらひ、さわぐ心を宥めすかすと――

われわれがまた同様に、旅立つてゆくその時まで、――彼らの去つた國へ向かつて。

されば旺んに、君が欲望をわき立たすがよい、

祝福の日を、念頭から追放してしまふやうに、

君が欲望の赴くにまかせろ、生命あるかぎりの日々は。

香膏を振り撒け、君の頭上に、そしてしなやかな衣をまとひ、

諸神の財寶なる正眞の驚異、その泣香を身に塗りこめ、

これまで君がたもつ善福、それになほ一段の利得を加へろ、

たぢろぐなよ、さあ、たぢろがずに、

地上における君が欲望^{のぞみ}、たのしみを追ひ求めろ、
哀悼^{えんぞう}の期が 君の上にめぐつて来る、その日までは。

胸に厭惡^{えんを}を抱く神（オシーリス）は、人々の哀悼にも耳を假^かさぬ、
どれほど歎き訴へようとて、冥途から心靈^{たましひ}を救^{たす}け出しはなさらぬのだ。

（リフレン）

毎日を たのしく暮らせや、けつしてそれに飽きることなく。

見ろ、誰にしても、彼の世まで財寶^{たから}をもつて往つた者はない、

見ろ、一人として、そこへ一旦往つたが最後、戻つた者はゐないのだから。

* 古代エジプトの墳墓には、よく彈琴者が歌をもつて饗宴に興を添へる態が描かれてゐる。本詩はハリス・パピルス五〇〇からのもので、西紀前一三〇〇年頃とされるが、これとよく似た詩がサッカラの墳墓（アマルナ時代、前十四世紀）からも見られる、この詩は題辭からしてエジプト第十二王朝前後インテフ（アンテフとも）王の治世を詠むと見られ、そのモラルは古王國崩壞後の混亂の時代を示唆するごとくである、しかしこれが新王國にも流行したらしいのは、古代エジプト人生觀の一面を伺はせるもの。

** 「神」とはパオオー、すなはちエジプト王のこと

*** 「祝願」とは死者への葬送の禮の義

**** 古代エジプトの代表的な賢人とされる。